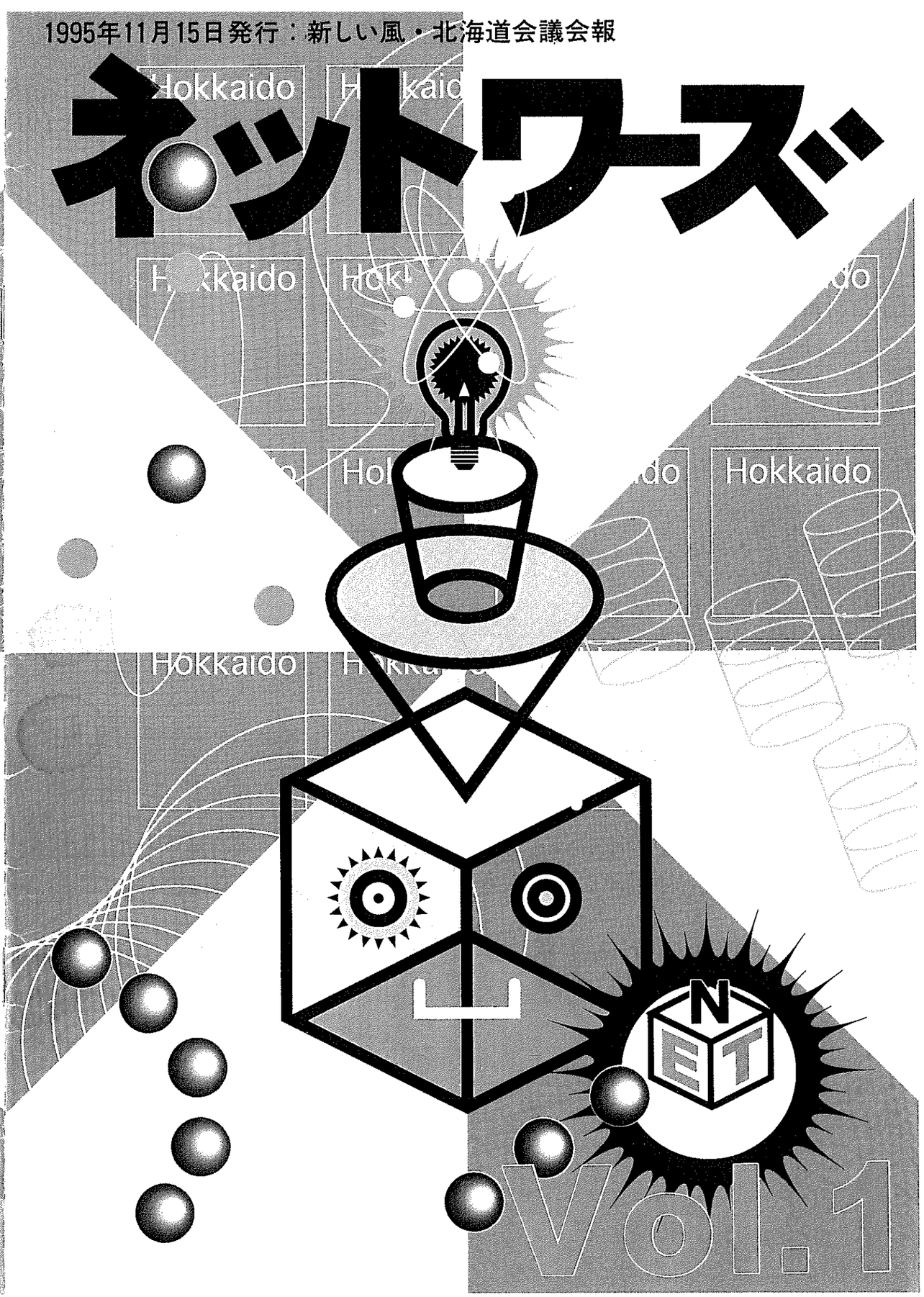
1995年11月15日発行：新しい風・北海道会議会報

ネットワーズ



Vol.1

もうひとつの政治勢力

新しい風・北海道会議

設立

今年は第二次世界大戦が終結して50年の節目の年です。戦後、日本は、アジア近隣諸国への侵略行為と植民地支配に対する深い反省の中から、平和と民主主義に立脚した国として再出発することを誓いました。そして、この誓いは国民主権、恒久平和、基本的人権の尊重を基調とする日本国憲法に生かされています。私たちは、今一度憲法の精神に立ち返り、自らの生活の場から活動を開始することを決意しました。

私たちは生活者としての一人ひとりの自主性を尊重し合い、個人参加によるネットワーク型政治組織〈新しい風・北海道会議〉を発足させました。

この会議は、参加者一人ひとりの意志が尊重され、自由な討議によって、変革と希望そして参画をキーワードとする「もう一つの政治勢力」をめざすものです。また、NGO・NPOなど多くの市民・社会活動団体、産業・経済や労働団体、政治グループとも連携・協力しながら、政治的提言をまとめていきます。

〈新しい風・北海道会議〉は、「新しい政治勢力」の基本理念と政策課題、活動目標や組織運営の在り方とその具体的プログラムを北海道から全国に向かって発信していきます。

道民の皆さん。私たちの歩みが、21世紀に向かう日本の民主主義の在り方を決めて行くことを確信します。

手を携えて、共に歩き始めましょう。

入会申し込みのご案内

※「入会申込書」に必要事項をご記入の上、ご投函下さい。
※会費は年額1口5,000円ですが、2口を基本として、10口以内の範囲でご協力下さい。
※会費の納入を受けた時点で、会員として登録されます。

会費の振込先は下記のとおりです

北海道拓殖銀行〈本店〉普通口座	3937280	口座名 新しい風 北海道会議
北海道銀行〈本店〉普通口座	2001977	
札幌銀行〈本店〉普通口座	383445	
北洋銀行〈本店〉普通口座	1589705	
北海道労働金庫〈本店〉普通口座	8622587	
郵便振替〈口座〉02740-6-18468		

ネットワーズ Vol.1

【発行日】1995年11月15日(Vol.1)
【発　行】新しい風・北海道会議
札幌市中央区南1条西7丁目　札幌スカイビル9F
☎011-232-3000　FAX011-232-3330

政治を変える"社会の力"

【ネットワーク】

「ネットワーク」が政治の場でリアルなキーワードになる時代がきた。既成の政党のワク組みでも、上意下達のタテ型のシステムでもない、ワクを超えた人と人とのヨコのひろがり。ネットワークの中から、新しい時代の政治のありようが見えてくる。

政治は、より良い社会をつくるための行動である。それは政党というワクを超え、市民運動や企業活動などさまざまな形で、しかも地域や国の境界さえ超えて、地球のいたるところで繰り広げられている。

「ネットワーク」という言葉は、幅広い意味を持っている。単なる「人のつながり」や「情報網」という意味にはとどまらない。

ネットワークは、直線的で単純なものではない。ダイナミックで多面的だ。とはいっても、けっして抽象的なものではない。きわめて具体的なかたちで地域に根を下ろし、日常の中に深く入り込んでいる。

道内のさまざまな地域、分野で活躍する人たちに、ネットワークについて語ってもらった。

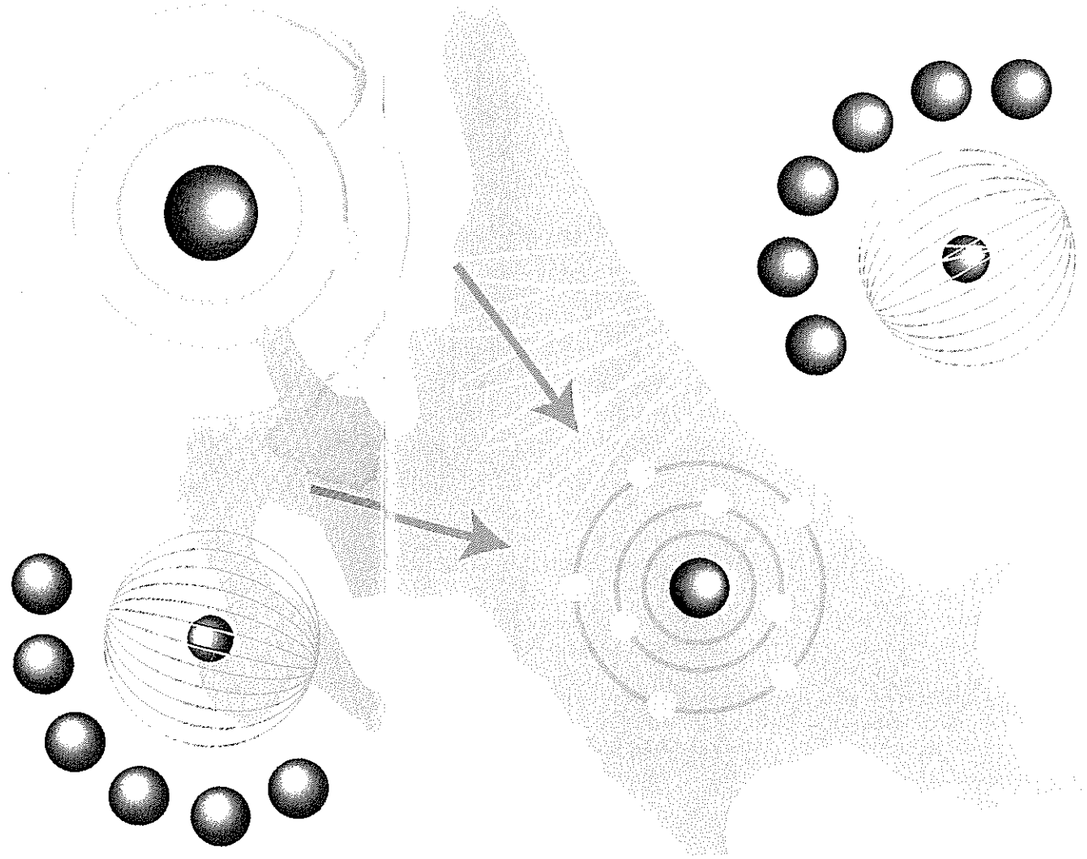
それを紹介する前に…。

横路孝弘さんはその著書『第3の極』の中で「ネットワーク」という言葉をどんな文脈でとらえているのだろうか。

政党政治の外では、無数の日常政治が繰り広げられている。自己主張をし、周囲を説得し、多くの人の支持を得て、環境問題への解決を共同で行おうとする試みなどかそうである。それは、多元的な議論の展開と同時に、共同、協力のネットワークを造り上げて、より望ましい社会を創造しようという社会的試みでもある。(中略) 要するに、プロの政治家が担う領域は現在では限られたものでしかなく、現実は政治の多元化、多様化が進行しているのである。

こうした動きは、世界の各地で生じている。先進国のみならず、開発途上国においても、この種のネットワーク型の市民運動、社会運動が繰り広げられている。これらが相互に結びついて国際的なNGOフォーラムなどが生まれている。そこでは「日本人」「中国人」「ドイツ人」「イギリス人」といった枠を超えて、裸の「地球市民」もしくは「人類」が共通の基盤となっている。日本はこれから徐々に分権型社会へと移行していく必要がある。21世紀初頭には、連邦型のシステムの一部を取り入れた「ネットワーク国家」ができあがっているかも知れない。「ネットワーク国家」とは、地域の自主性・自立性が相当程度認められ、国はその連合体として事務局的な仕事に専念する国家のことである。(中略) ネットワーク国家の下では、自主的で自立的な新しい市民活動、住民運動がますます活性化し、地域を動かす「社会の力」となるだろう。

要約すれば、「政治は、より良い社会をつくるための行動である。それは政党というワクを超え、市民運動や企業活動などさまざまな形で、しかも地域や国の境界さえ超えて、地球上のいたるところで繰り広げられている。ネットワークはそうした既成のワクを超えた『社会の力』になる」というのである。



長い間はびこってきた古い権威や組織の形態も、崩れさろうとしている。古いものと新しいものの両方を知っている自分たちの世代が果たすべき役割は大きい。

ネットワークについて、まちおこしのネットワークのキーマンの一人、川口英孝さんにきいてみた。

川口さんは、道南の檜法華村でこの十年来、村おこしに挑戦し、地域アドバイザーとして全道を股にかけて活躍してきた。川口さんにとってネットワークとは「ものごとに対する固定的な考え方や行動のワクをこわし、ものの見方を変えて新しい自分の可能性を広げてゆくライフツールのようなもの」だと言う。

「地域のワクから飛び出してさまざまな人と出会い、議論をしたり共同作業をすることを通じて、自分や自分の住む地域がよく見えてきた。一面的なものの見方から脱却することが大事だと思います。一つの行動が、何百冊もの本を読むよりプラスになるということがあるんです」

一つの角度からだけでは立体物の全体をとらえることはできない。同じように、物事もさまざまな角度から見なければ「なにが大事なのか」が見えてこない。たとえば、自分の住む町にはきわだった魅力もなければ大きな観光施設もない。何にもないと、そこに住んでいる人が思っていても、都会からやって来た人にとっては、緑があり豊かな自然が息づく夢のような心のふるさとだったりする。コインの裏表のように、地域を中から見る視点と、外から見る視点の両方が必要だ。そして、表と裏の間には厚さもある。

同じように、あるワクの中だけで物事を考えるのと、ワクを超えたひろがりの中で発想するのとでは、大きな違いがある。

「たとえば、村の中で一つの事業を進めるとするでしょう。かりに観光施設をつくるとする。村の中だけのことを考える人とそうでない人とでは、事業の内容そのものが同じでも、発想の切り口、問題の捉え方や解決のしかた、進め方が大きく変わってくる。それどころか、『何のために』という目的まで違うものになる」

村おこしや町おこしを、川口さんは「人間解放運動」として位置づけている。一面的で固定的なものの見方を変え、自由な発想や開かれた人間関係を構築してゆく中からこそ新しい可能性が生まれてくると考えている。

「戦後が半世紀を経て、21世紀があと数年後に訪れようとしている今、いろいろな意味で、古いものと新しいものを入れ替えるべき時期が来ている。何年か前では、新しい時代、僕らが到達しなければならない地点というのは、壁のそのまたむこうの壁の、さらにずっと奥にあると思っていた。それを一枚一枚食い破っていかなければならないと。でも、実は壁一枚、もしかしたら襖一枚へだてて背中合わせにあるんじゃないかという気がするんです。息の音が聞こえてきそうな…。意外にみんな、特に若い人たちはそれを感じとっているんじゃないか。たとえば、長い間東西を分断していたベルリンの壁。僕らはあれを壊すことのできない絶対的な壁だと思っていた。でも、壊れてしまえば、なあんだと思う。それと同じように、長い間はびこってきた古い権威や組織の形態も、崩れさろうとしている。古いものと新しいものの両方を知っている自分たちの世代が果たすべき役割は大きいと思います」

川口さんは横路さんと同じ「団塊の世代」である。

エコブリッジ

ほかの地域を訪れて、そこに根を下ろして生きている人に出会うと、そこが自分のもう一つのふるさとになる。日本中に、世界中にふるさとを持つ人になりたい。

自他共に認める「ネットワーカー」の一人に、常呂町の辻孝宗さんがいる。

辻さんは「ネットワークは、地域や人間が元気に、おもしろく生きていくための原動力」だと言う。

「この十数年は際限のない出会いと発見の繰り返しでした。会いたい人がいると、とにかく出かけて行く。常呂は僕の生まれ故郷ですが、常呂の風や海を全部背負って人に会う。ほかの地域を訪れて、そこに根を下ろして生きている人に出会うと、そこが自分のもう一つのふるさとになる。日本中に、世界中にふるさとを持つ人になりたい。」

〈ふるさと〉とは「あったかくて、かかわりたくて、育てたいと思うところ」だという。

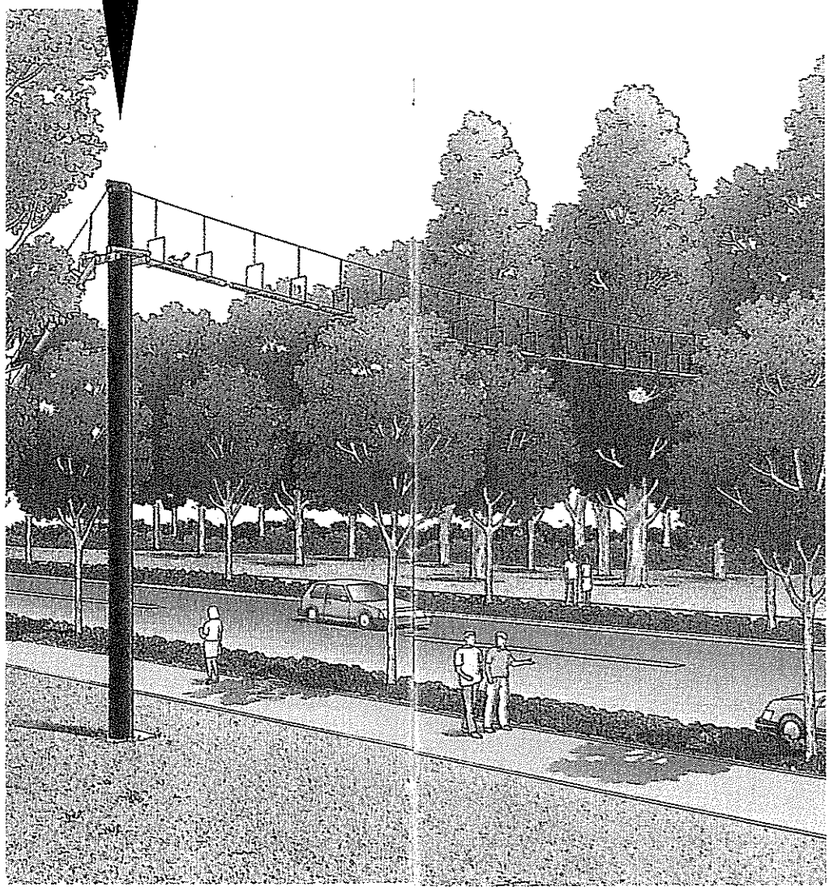
「まちづくりの主人公は、そこに住んでいる人だけではなく、そこにふるさとを感じるすべての人だと思うんです。さまざまな人との出会いによって、自分自身はもちろん、地域で暮らすことが豊かになっていきます」

出会いを求めてほかの地域を訪れるばかりではない。辻さんは町の仲間といっしょに、第一線で活躍する数多くの優れた人材を自分の町に招いてきた。ミュージシャン、画家、映画監督、学者、スポーツ選手など分野は幅広い。そして、常呂を舞台に、また新しい出会いが生まれてゆく。

「自分の住んでいる町が創造的な人と人の出会いの場になって、きらきら輝いてほしい。常呂を心のふるさとにしてくれる人を、日本中につくっていきたい。世界中に仲間を持つ町にしていきたい。この十数年の間に、一歩か二歩、その夢に近づいたという実感があります」

点にとどまるのではなく、点から線、線から面へとネットワークは広がっていゆく。それは、地域の外にばかり向かっているのではない。サロマ湖に面し、ホタテの一大産地として知られる常呂町では、海と森が対話を始めた。

近年、森林のむやみな伐採が水産業におよぼす影響が深刻になっている。豊かな海を自分たちの手で守ろうと、地元の漁協が中心となってオホーツク海に注ぐ常呂川の上流域の土地を買い、植樹するというムーブメントが起こった。森と海。いつの間にか断ち切られた二つのものを一つにし、共に生きる関係を回復する息の長い営みである。



『エコブリッジ』
(札幌市発行のパンフレットより)

みんながいっしょに何かを進めてゆくためには、それぞれが自分の役割を見つけ出すことが大事です。新しい役割を見つけることができれば、新しいことを始めようと地域に提案することもできる。

剣淵町の授産施設「剣淵北の杜舎」施設長、横井寿行さんは、福祉に携わる立場から「ノーマライゼーション」をテーマに、障害を持つ人とそうでない人との間に横たわってきた地域の垣根を取り払うことに腐心してきた。

この数年、剣淵町は「絵本の里」として注目を浴びている。また、地元の農家が無農薬・低農薬の米や野菜づくりに熱心に取り組み、有機農産物の町としても知られるようになってきた。じつはどちらも、横井さんの地域でのノーマライゼーションの実践と深い関わりを持っている。

「福祉というと、どうしてもある特定の分野、場合によっては特殊な分野という見方をされてしまうことがあります。福祉の原点は人間性の尊重であり、共に生きるということです。それは、地域(コミュニティ)の原点にも共通するものです。福祉という限られた分野だけでなく、農業をはじめとする地域の産業、あるいは文化も含めて地域のあり方をみんなで考えてゆく。新しい関係をつくってゆく。一つのテーマをさまざまな立場の人が共有するには、入り口は多いほうがいいんです」

地域の中に、垣根を超えた人と人のネットワークができてゆく。そして、町づくりのムーブメントが起こり始めた。

「地域の中でみんながいっしょに何かを進めてゆくためには、それぞれが自分の役割を見つけ出すことが大事です。新しい役割を見つけることができれば、新しいことを始めようと地域に提案することもできる。たとえば、私たちのような施設は、入所者も職員も含めてマンパワーがあるわけです。それを農業にいかしてゆく、あるいはさまざまな文化活動にいかしてゆく。農作業を手伝うのが難しければ販売を手伝うという具合に、自分たちの役割を見つけ出し、行動を積み重ねてゆくことで地域に参加し、一つになれる場をつくってゆくことができます」

ネットワークを構成する単位は〈人〉であり、ネットワークと個人を結ぶものは、その人が自発的に見つけだした〈役割〉なのだ。

〈権威〉や〈権力〉の階層や制度で成り立つ組織ではなく、それぞれの言葉でテーマを共有しそれぞれが自分の〈役割〉を見つけて参加する協働の場をつくってゆく。それが横井さんの町づくりのイメージだ。ネットワークそのものといえる。

ネットワークというのはアメーバーのようなものでいい。ネットワーク、ネットワークと言っているうちに、それが固まって一つの勢力になることもあるんですよ。

「ネットワークの構成単位は人だけれども、ネットワークの広がりはなにも人間社会に限定すべきではない」というのは、エコネットワーク代表の小川巌さん。

小川さんは野生生物の保護と、人間と自然の共生をテーマに、十数年間、札幌を拠点に活動を続けてきた。

「ネットワークということについていえば、僕はテンポラリー・ネットワークと言ったほうがいいんじゃないかと思うんです」

テンポラリーは「一時的な」「その時その時の」という意味だ。

「ネットワークというのはアメーバーのようなものでいい。ネットワーク、ネットワークと言っているうちにそれが固まって一つの勢力になることもあるんですよ」

先に紹介した川口さんも同じ問題を指摘する。「既成の組織とは違うやわらかさがネットワークの本領なのに、うっかりすると、かつて僕らが若い頃に反発した体制と同じになっていた、なんてことにもなりかねない」と。

「だから、形や関わり方を固定化せず、何かをやるときに一つになるというスタンスがいい。それを繰り返しているうちに、社会はしだいに変わってゆく」と小川さんは言う。

「たとえば、15年前に有機農業とか無農薬云々と言っている人は、少数の変わり者だった。今ではどこでも有機農業と言ってるでしょう。スーパーでも『有機農産物』が売られているんですよ。僕が最初に野生生物情報センターを設立したときもそうでした。エコロジーという言葉も今では日常用語になっています。遠成度はともかく、裾野が広がってきているのは確かです。それくらい世の中は急速に変わってきています」

行政も大きく変わってきている。

「もちろん、旧態依然とした部分もあるし、制度や法律もそう変わっているわけではありません。でも、人が変わってきている。新しい意識を持った人が育ってきている。だから、ただ行政を批判するだけではなく、我々が知恵を出してゆく。普通の市民の感覚を持ちながら、その一方であらゆる情報を集めて具体的な提案をしてゆく。住民が何を求めているのかを具体的な形にしてゆく。ところが、なかなか正面から向き合ってもらえないことも多い。行政はチェックを嫌がりますね。市民サイドからのチェックに慣れていないんです。ですから、相撲をとっているときに、いきなりボクシングのルールを持ち込むようなことをしなければならないこともありますよ。何しろ、自然や野生生物の世界と、普通の市民の感覚と、役所の制度を結んでいかなければならない。もともと文法というか文脈が違うんです。ですから、問題を一つ解決すればまた新しい問題が起こってくる。いたちごっこみたいだけど、でもそれを執拗に繰り返していくのが一番の近道なんです」

小川さんは今、傷ついた野生動物を人間の手で治し、再び野生に返す運動のネットワークをつくりたいと考えている。野生動物の医療・福祉である。

「シカが交通事故に遭う。その原因は人間がつくりだしたわけだから、人間の手で何とかするべきなんです。シカがひかれるような道路は、人間にとっても危険です。実際にシカが原因で死亡事故も起きている。そういう事故が起きないような道路をつくるべきです。一からつくるのは大変だけれども、今ある道路や、これからつくる道路の設計を少し変えてゆくだけでも、ぐんと改善できる」

小川さんの発想はしなやかだ。

そうした発想が具体的な形になった一つの例が、エコブリッジだ。札幌の屯田にある「ポプラ通り」。明治時代からあったポプラの森が、グリーンベルトとして整備された、大通公園をポプラの森にしたようなものと思っていい。大通公園と同じように、車道が帯状の森をいくつかに分断している。森にはエゾリスが生息している。エコブリッジは車道を越えて森と森をつなぐ、リス専用の「歩道橋」だ。小川さんは、札幌市の事業として行われたこのプロジェクトに委員の一人として参加した。

エコブリッジは、車社会によって分断された森から森へのリスのための橋であると同時に、人間社会と自然の橋渡しのシンボルでもある。

「本州から友達がやってきて、車に乗せてそこを通ると、『あれ何?』って訊かれるんですよ。『リスの歩道橋。森が切れてるからね』と答えると、『いいなぁ、北海道は』と言うんですね。ほかの地域から来た人に『いいなあ』といってもらえるようなもの、『これが北海道の心なんだな。北海道はやさしいな』と思ってもらえるようなものを、どうせつくるなら、たとえ時間がかかってもつくるべきですよ。後ろを振り返れば、とりかえしがつかないものがないわけではないけど、これからの生き方を考えるのは今からでもまだ遅くないと、僕は思いますよ」

ネットワークのキーワードは、〈しなやかさ〉と〈したたかさ〉と見つけたり。

地域活動グループにみる【町おこし】

全道各地には、その地域に根差した様々な活動をしているグループがたくさんあります。そんな中で今回は12グループにスポットをあて、紹介してみます。

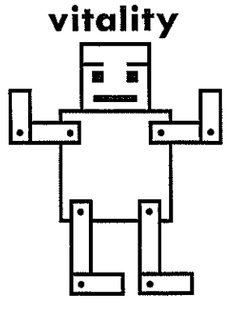
①団体名　②連絡先住所・電話・FAX　③代表者名　④会員数　⑤設立（活動開始）年月日　⑥活動内容　⑦他のどんなグループとネットワークしたいか　⑧政治に望むこと、又は「新しい風・北海道会議」に望むこと　⑨活動ＰＲ

①協同組合 イ・エムネットワーク
②札幌市北区北20条西2丁目19－43
TEL 011－737－1421
FAX 011－737－1422
③松本 邦夫（理事長）
④6名㈱
⑤平成6年5月
⑥微生物を用いて環境（水・土・空気・廃棄物）浄化
⑦ゴミ問題、有機農業、環境浄化
授産施設における自立のためのお手伝い
⑧起業家の育成（研究開発に投ずる費用の助成、あるいは公的金融機関をもっと身近な相談相手となれるよう体質改善）
規制緩和と共に各自治体が新しい事への挑戦する姿勢（失敗を恐れない行政マンの育成）
⑨身近な家庭から出される生ゴミの堆肥化による有効利用
各産業から排出される有機物の完全リサイクルの啓蒙とその有効利用
授産施設にて自立する為の作業の提案

①21世紀の福祉の実現をめざす道民集会実行委員会
②札幌市中央区北5条西18丁目 ダイアパレス北5条 302 オーロラ共同作業所気付
TEL 011－641－8107
③西村 正樹
④200名
⑤1990年11月
⑥人権を基本とした福祉社会を北海道及び札幌市において実現するための各種集会、講演会、学習会等の啓発、研究事業及び行政機関への働きかけを実施しています。
⑦社会的に不利な状況におかれながらも、そうした問題解決に向けた取り組みを進めているグループ及び人権を運動の基本理念として活動しているグループ、そして多くの市民。
⑧「福祉」「人権」「環境」「平和」を尊び、誰もが共に暮らすことのできる、人間性豊かな社会づくりをしていただきたい。
⑨私たちは特に障害者の課題を中心に運動を進めています。「障害」とは、その人自身ではなく人と社会との関係から生じるものです。障害者の問題を解決することは、すべての人の基本的な問題を解決することであるといわれています。私たちは今こうした運動を更に進めるために「福祉」「人権」「環境」「平和」を基本として活動しているＤＰＩの世界会議をアジア太平洋障害者の10年の最終年である2002年に札幌への招致運動を進めています。多くの皆様のご支援ご協力をお願い申し上げます。

①270万石空知結ばん会
②栗沢町東大町
TEL 0126－56－2046
③中田 信広
④300名
⑤平成元年5月27日
⑥空知27市町村の地域づくり交流会、広域イベントの実施
⑦全国の地域づくりのグループとのネットワーク。
⑧もっと身近に、やさしく分かりやすい庶民の言葉で語り合うこと。
⑨11月25日㈯北村温泉で下半期の全体交流会を開催します。

①現代・観劇＆感激の会
②〒098－158
枝幸郡枝幸町字幸町115 枝幸商事（名）内
TEL 01636－2－1346
FAX 01636－2－1055
③藤尾 俊郎
④25名
⑤平成5年6月1日
※この団体名になったのは同年10月21日
⑥平成5年10月 劇団「現代座」公演主催
平成6年5月 劇団「風の子北海道」公演主催
平成6年9月「ハード・トウ・ファインド」コンサート主催
平成7年5月 人形劇団「えりっこ」公演主催
平成7年10月「北海道音楽年鑑'95コンサートIN枝幸」主催
⑦住民主体で文化活動をしているグループ。又、地方中心に巡回活動をしている音楽家や演劇団体など。
⑧「箱物行政」には正直言ってウンザリです。人と人との間に心の通いあえる政治を望みます。
⑨自分たちで「やろう！」という気をおこさなければ「何も無い町」に住んでいますので、とにかく「何とかなるだろう！」の精神で何とかやっております。かなり「いいかげんな」グループですが。



①なんぽろ夢物語21
②空知郡南幌町栄町1丁目4番7号
TFL 011－378－2221
FAX 011－378－0846
③常井 昭人
④55名
⑤平成元年4月1日
⑥イベント活動、人材育成等
⑦今、270万石空知結ばん会との交流をおこなっています。
⑧別にありません。今後の活動内容が問題でしょう。
⑨空知の仲間が手を取り合い、住み良い我が街にしたいとの思いをもった者が集まり、酒を酌み交わし論議を重ねています。

①旭川チカップニ アイヌ民族文化保存会
②旭川北門町11丁目
TEL 0166-51-2461
FAX 0166-52-6518
③川村シンリッ・エオリパック・アイヌ
④30名
⑤昭和58年4月
⑥古式舞踊。昭和59年1月21日、道内8市町にある8つの保存会が「アイヌ古式舞踊」として国から重要無形文化財の指定を受けています。
⑧伝承活動費の助成をお願いします。
⑨道内でも保存会を観る機会があまりないので、発表する場が増えることを願います。

①株式会社ケアサービス
②札幌市豊平区真栄5条2丁目1番5号
TEL 011-885-7788
FAX 011-885-7181
③対馬 徳昭
④74名（常勤54名、非常勤20名）
⑤昭和61年3月13日
⑥在宅介護サービス
介護用品、福祉機器、大人用紙オムツ、医療機器、医療消耗品の販売
介護機器レンタル
住宅リフォーム
⑧政策集団として北海道民にとって豊かになれる街づくりを望みます。

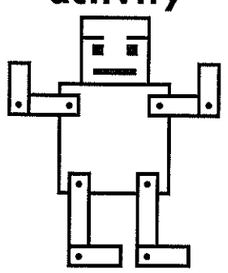
オホーツクの風

①オホーツク寒気団
②〒099-111
常呂郡置戸町字北光45-48 オケクラフト工房
髪切虫（井田博章）
TEL 0157-52-3619
FAX 0157-52-3619
③船木 耕二
④50名
⑤1989年
⑥オホーツクの地域づくりを目指した活動をする人々とのネットワーク形成を目標にして、情報交換、会員及び地域住民との交流事業、個々の資質を高めるためのフォーラム、セミナー等を実践しています。
⑦国際化へ向かっている地域社会の活動を視野に入れた、ダイナミックに展開できるネットワークづくりを進めたいと考えております。
⑧住民個々の人権と尊厳が第一に守られ、小さな声も反映される成熟した民主主義を政治に望みます。新しい風・北海道会議の役割は、これらの名も無き人々の希望の灯火であり、その使命は計り知ることの出来ない重さをもっています。
⑨オホーツク地域以外の人達でも、好奇心のある方への門戸を開いていますので、いつでも声をかけて下さい。

①銀山コミュニティー推進協議会
②余市郡仁木町長沢西255番地 銀山学園（事務局 瀬野）
③名誉会長／野村 健 会長／永富 正
④70名
⑤平成4年4月1日
⑥文化教養部会 銀山小史編纂、文化祭・地区学級の企画開催
文化イベント部会 文化財保護、郷土芸能等文化振興
地域福祉部会 仁木町福祉セミナー開催への協賛、高齢者世帯を対象とした除雪ボランティアの組織化
多目的施設部会 銀山地区活性化の調査、企画など
⑦住民参加と自立を基本としたグループとの連携。
⑧自立した市民ネットワークとその声が町・道・国政に反映されること。
⑨住民の自主と自立を基本に地域住民の幸せづくりを目指したいと思います。

①スピリッツof開陽
②標津郡中標津町東8南1
TEL 01537-2-13398
FAX 01537-2-0487
③武田 信一
④15名
⑤平成6年1月1日
⑥中標津町の地球が丸く見える丘、開陽台を中心にして地球環境問題、生命（いのち）たちの共生とは何かを追求しながら、佐々木譲原作の開陽台を舞台にした小説「振り返れば地平線」を映画化したいと活動しています。
⑦地球のために何かをしようとしている人、何かを始めた多くの人達と出会えることを望んでいます。
⑧透明で清潔な本当の意味での「新しい風」が吹くことを期待しています。
⑨先頃、開陽台旧展望台のコンクリート壁メモリアルを新しい展望台に取り付けました。「地球と宇宙の摂理を感じ、広い視野を得て謙虚な姿勢を持ちたい」と記され〝風の想〟と刻まれているメモリアルを是非見に来てください。

activity



①どんぐり共和国
②河西郡更別村更別どんぐり村
TEL 0155-52-2710
③野島 隆
④約40名
⑤昭和62年3月
⑥今までに4万5000坪の雪原に更別村のキャラクター「どんぐりマーク」を描いたり、500人の人文字、今年で9回目になるどんぐり村の冬祭りなどのイベント、ライダーハウスの運営、金酒会の開催、更別村再発見冊子「コムニ」発行、オリジナルポストカード制作、第7回北海道ミニ独立国連邦サミット、ライダー祭り開催など。
⑧更別村は3400人の小さな村ですが、公共施設等の人口比での充実度は北海道の中でもトップクラスだと思います。しかし、ハード面の充実とは裏腹にソフト面は遅れている。〝むら作りはひと作り〟とよく言われますが、なかなか難しく、一般住民と行政との結び付きが少ないのが現状です。行政は最大のサービス産業で、多くの住民の生の声を聞き行政サービスに反映するのが理事者の仕事。「村の中に役場がある」ではなく「役場の中に村がある」のが現実で、上からの押し付けではなく下からの盛り上がりが、むら作りの原点だと思います。今までの私たちの活動は、政治と切り離し行政や政治と距離を置いて活動してきました。これからは政治を動かし私たちのむら作りの思いを伝えていきたい。
⑨建国から8年が経過し、それなりの実績と評価はありますが、最近は家族単位で活動をしています。ただ、大統領のわがままで創ったグループで、代替わりがうまくいきません。今後はイベントから脱皮し、地についた活動をしていきたいと思っています。

①ボラン広場北海道
②札幌市中央区大通西23丁目 らる畑内
TEL 011-614-3835
FAX 011-614-3836
③橘本 早知子
④一つの共同仕入れセンターと宅配、9つの小売グループで成り立っており、特に会員制度はとっていません。
⑤1986年8月
⑥有機農産物、無添加食品、エコロジー商品の流通販売。
有機農業を拡げるための生産者や消費者との交流、講演会、イベント開催。
機関紙の発行。
日本の第一次産業や環境問題を考える他団体とのネットワーク。
⑦すでに、食や環境問題を考えるグループとはいろいろネットワークを組み、講演会、イベントなど開催しております。〝食〟はすべてにつながりますから、21世紀の地球、社会の在り方など真剣に取り組もうとする団体、グループ、個人とは幅広くネットワークを組みたいと思っております。
⑧日本の自給率は37%まで下がっています。行き当たりばったりの農政ではなく、遠い将来を見通したうえでの行政を望みます。人が生きていくための糧を得ることは、経済効率だけでは語れません。あらゆるものが有機的につながれるよう望みます。
⑨ボラン広場は、お百姓さんや漁師、牛飼いの人たちと畑のこと、海のこと、村のことなど話し合いながら土を活かし、人を活かす有機生産物のあり方、社会のあり方を考え続けています。有機農業を応援し生産者と共に、この地球に豊かな土地を残したいと願っています。

【今の若者はバカだ】と言う前に理解のためのキーワードを探ろう

KEYWORD

YOUNG FORUM ヤング ミニフォーラム 報告

さる9月6日、横路孝弘さんを囲んで、若者たちがざっくばらんに語り合おうと座談会が開催された。原則的に20歳から29歳までという年齢制限付き。当日は、学生・会社員・公務員など、さまざまな立場から29名が参加し意見交換が行なわれた。そもそもがテーマのない勝手気ままな座談会だったにも関わらず、「戦争」「ボランティア」「就職」「政治」と、いずれも重い社会的な話題に関して、若者ならではのユニークな視点がのぞいた発言が次々と飛び出した。「新しい風」に対する率直な注文もちらり。各キーワードごとに「フォーラム」を振り返ってみたい。

KEYWORD 歴史と戦争

「今もし従軍しろと言われたら?」「自分の命を賭けられるものを見出せるかどうかが問題」（男・団体職員）

男・学生　僕は、歴史の勉強についてはおかしいと思っています。教科書を古代からずっとやっていくわけですが、どうしても近代までいかずに1年間が終わってしまう。そして次の年にはまた違うところへ進むというのが一般的です。戦後50年、僕たちは日本のかつての罪というのをほとんど教えてもらわずにここまできました。ところが、例えば韓国では、教科書の3分の2くらいのページが日本の侵略のことで占められていると聞きます。このギャップはおかしい。僕は、近代から歴史を教えてほしいと思います。

横路　全くその通りですよね。歴史の話が出たところで、みなさんは戦後50年ということについてどんな意見を持っていますか。

男・会社員　テレビなどで、戦後50年だからと、戦争を起こしてもいないし、起こす気力もないような若い人をつかまえてインタビューしているシーンをよく見かけます。でも、そういう質問を投げかけて、「戦争を知らない若者はバカだ」というのが大事なことなのでしょうか。そんなことよりも、今のぐちゃぐちゃした世界の中でどうしたら戦争など起こさずに済むのか、マスコミの人たちがもっと考えていくべきなのではないか。テレビを見るたびにいつも不愉快になります。

男・学生　今、もしみなさんが「日本は戦争するから従軍しろ」と言われたら、しますか？

男・団体職員　俺は従軍します。命を賭けて戦えるということはすばらしいことだと思います。国のため云々ではなくて、自分の命を賭けられるものをそこに見出せるかどうかが問題ですね。

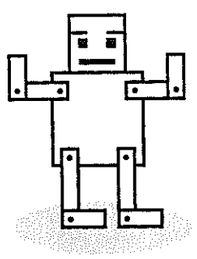
男・学生　今、国際化とか情報化とかいわれている時代に、そんなに国のために死ぬ人間がいるのかなと思ってしまう。これからは国のためにあくせく働く時代ではないんじゃないか。一人ひとりが自立する時代じゃないかと思うんです。

男・会社員　戦後の若い人たちに対する期待の仕方で一番間違っていると思うのは、「とにかくお前ら戦わなければいいんだ」ということ。その結果として、年上の人たちにも仲間にも逆らわず、争わない、一億みんな〝公家〟みたいになっちゃった。そういう状態がいいのだろうかということをすごく感じます。

横路　私たちが今何を守らなければいけないのかということだと思うんです、一番大事なことは。守らなければいけないものはたくさんあると思う。地球の環境、水や空気を含めた資源、それから何より平和であるということ。今生きている我々の時代にやはりちゃんと守って残していかなくてはいけないものがあるんですね。戦いというなら、そういうものに対する戦いが今大事ではないかと思うんです。今みなさん何に関心がありますか。紛争？環境問題？年をとること？何が守るべきことなのでしょうか。

女・団体職員　私は何を守りたいとか、何を守るべきとか、正義は何だとかいう高尚な理念は実は何もないんです。要は自分が畳の上で死ねればいいんですね。戦場で死ぬのもいやだし、環境破壊によっていろいろな病気になって死ぬのもいや。要は幸福な老後を送りたい（笑）。そのために何かをしなければいけないとしたら、それはします。とてもエゴイスティックな考え方かもしれないけれど、自分の幸せのために何かできることがあればやる。たぶん正義とか使命感に燃えていらっしゃる方もいると思います。そういう人の意見ももちろん聞いてみたい。

女・会社員　少しヒューマニスティックな意見を言わせていただければ、まず「人が死ぬ」のはいけない。不合理な力によって命を奪われたりしてはいけないのではないか。そこから始まると思います。やはり基本的人権というものは侵害されてはいけない。そう考えると、例えば高齢化問題にしても環境問題にしても、全部自分につながっている。自分も日本国民の一人として、世界やいろいろな人たちにさまざまな力を及ぼしていて、責任もあるんですよね。



KEYWORD ボランティアと町づくり

「そこに何か大きなイベントがあるんじゃないかと思って、神戸へ行きました」（男・学生）

横路　神戸へボランティア活動に行かれた方はどういう気持で行かれたのか。経験談を聞かせてください。

男・学生　震災2週間後から1カ月間行ってきました。正直に言えば、楽しそうだなという気持があったんです。テレビで地震の瞬間を見て「すごいな」と。人を助けようというのではなく、ただ興奮していた。そこに、何か大きなイベントがあるんじゃないかと思って行ったというのが、正直なところです。

ただ、そこでやはり思ったのは、地域社会の中で、隣の人を知らなかったというのが、地震の被害を大きくしてしまったんですね。隣のおじいちゃんやおばあちゃんが一人暮らしであることを知っていたら助けられたかもしれない、なんていうのはどこにでもあった話です。地域社会といっても、人間関係がほとんどない。

地震によって壊れた街の中から見えてきたのが、日本がずっと守ってきた社会。例えばお年寄りの問題や観光重視の問題。地域の中での差別というのもかなりあった。それが、街が復興することでまた隠されてしまう恐れもあるんですね。それだけはしたくない。大切なのはやはり人間関係。街づくりだって地域でしていけばいい。上の政治家たちが利権がらみでつくっていくのではなく、人間の輪の中から街が生まれればいい。街は人間が住むところ。神戸には、せっかく出てきた矛盾を消さずにつくっていける街ではないかという期待を持っているので、これからも度々行こうと思っています。

横路　街づくりは長期的な構想を持って造らなければいけないと思います。日本人は何でもバタバタとやるクセがある。長いスパンで街づくりというのを構想していかなくてはいけないと思います。今我々に必要なのはそういう構想力ですね。

隣に住んでいる人が、一人暮らしの老人がいることを知らなかった。もっとそこにコミュニケーションがあれば助かったかもしれない、ということも大事なポイントだと思います。地域の中の連帯感というものがどうやってできていくのかということなんですよ。私などが知事としてやってきた狙いも実は、連帯感をどうつくるかということなんです。小さな町や村へ行っても、人というのは必ずしもヨコのコミュニケーションがないんです。これがやはり、タテ社会としての日本の非常に大きな問題なわけです。それをどうやって本当にコミュニケーションのいいヨコ社会にしていくかというのが、地域にとって大切になってくるんです。では、地域社会の中でのヨコのネットワークは何かというと、それは例えばいろいろな町おこしの運動であったり、福祉のネットワークであったり。そういう広がりが出ていくと、みんなのコミュニケーションがよくなってくるんです。それがベースにあると、何かの時にみんなでつなげていくことができる。

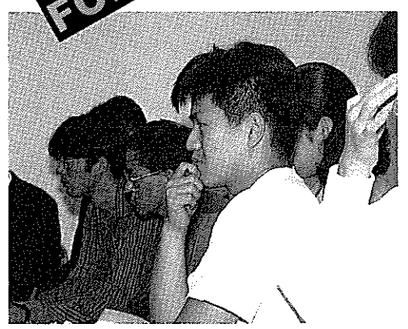
男・会社員　ボランティアに関連していうと、もっともっと若い人たちがボランティア的活動をするためには、もう少しそれ専門のよろず相談所というか、行政の窓口がほしいなということも前々から感じているんですが…。

横路　行政にいろいろとアドバイスを求めたり、応援を求めるというのがいいかどうかは議論がありますね。市民運動が持っているいろいろな要求を行政の政策の中にどうやって受けとめてもらい、協同作業として合意形成ができるか、ということは大変大きい課題なんです。「新しい風」が将来大きい力になっていけば、NGOやNPOといった市民グループのさまざまな運動に情報を提供したり、政策化したり、あるいは政策スタッフをもっと準備して、行政との間でアドバイスをするということもやっていきたいと思っています。

これからの時代の政治参加というのは議会を通じてということだけじゃない、多様な形でできてくる。町おこし運動というのも、実は政治参加なんです。自分の町をどうよくするかということでしょう。どうよくするかというのは、まさに政治の仕事ですからね。

町おこし運動というのは、参加している人が意識しているかいないかは別として、その町の政治に参加している一つの形態だと思うんです。

YOUNG FORUM



KEYWORD 就職戦線と北海道

「横路さん、『投票率』と『就職率』を上げるにはどうしたらいいと思いますか」（男・道職員）

男・大学院修生　今日僕が横路さんにお会いしてお話したかったことは、やはり「雇用」の問題です。私の学校は国立大学でもなければ、一流大学でもありません。けれども一生懸命勉強している学生はいます。ところが、彼ら彼女らには職がないんです。北海道に民間の地場産業が少ないために、かなり苦しい戦いをしています。国立大学出身者や北海道にUターンしてくる学生が、相変わらず優先されている。そういった学校間格差を何とかなくしてほしいと思うのですが。

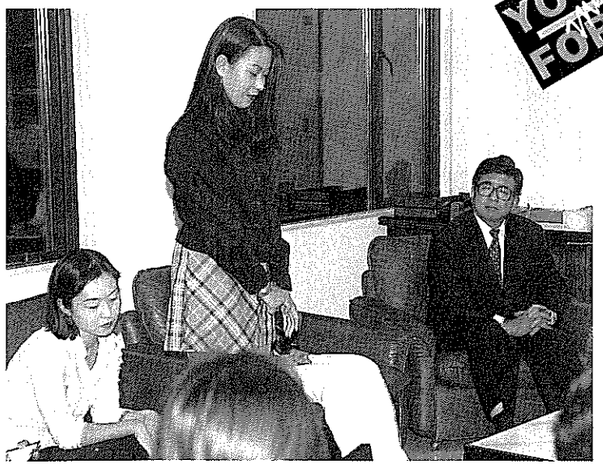
女・会社員　私は、事情があって短大を卒業してから就職活動をしました。ちょうど景気が悪い時と重なったせいもあるのかもしれませんが、いざ社会に出てみると、学生の頃思い描いていたものとはずいぶん違うなというのが感想です。北海道の民間企業は強い所がなくて、ほとんど本州からの資本でできている。そんな中で、北海道で事業を起こしたりする場合は政治の力を借りた方がいいといわれているようですが、本当のところはどうなのでしょう？　どこまで行政が加担して、どこから北海道が自ら起きる要素があるのか。雪や交通の問題など、抱え込むマイナス要素が多い北海道では、行政の果たす役割にも期待したいと思っています。

男・道職員　前回の参議院選挙で全国的に投票率が下がったことは、ものすごいショックでした。なぜそんなに落ちてしまったんだろう。「自分はわからないから」とか「誰に入れても変わらないから」というふうに、人の「考える」能力が落ちてしまったのかな。やはり政治というのは国を変えることだから、投票率の低下というのは結局就職にも影響しているのではないかと考えています。

横路さん、一政治家として、「投票率」と「就職率」を上げるにはどうしたらいいと思いますか。

横路　大学生のみなさんにとっては、これからますます就職は大変になっていくと思います。雇用問題は本当に深刻になっていく。ではどういうところに新しい雇用をつくっていくのか……。

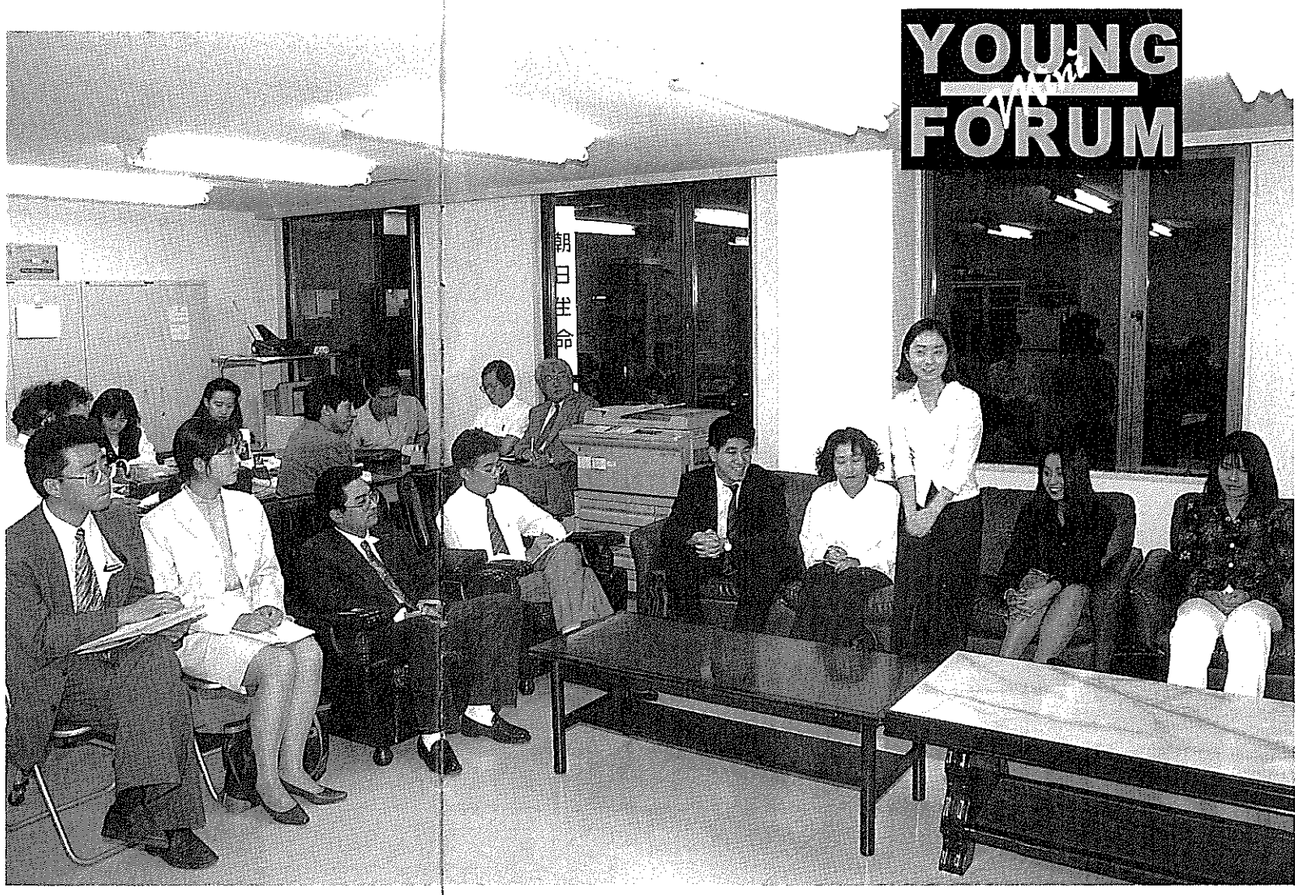
北海道の場合、新しい仕事を起こす「起業」率は全国的にも高いんです。同時にビジネスチャンスはものすごくあります。本州にあって北海道にない仕事というのは、サービス産業も含めてずいぶんたくさんあります。例えば最近若い女性で、託児所をつくるのではなく、子育てを終えた女性たちと契約して午前中だけ子供たちを預かるといったサービスネットワークで業績を伸ばしている人もいます。また、そういった新しいビジネスを支える制度・仕組みというのも北海道にはあります。ですから大学生のみなさんもチャレンジしてみてはどうでしょうか。まあ、簡単なことではありませんが。



KEYWORD わかりやすい政治と「新しい風」

「若いみなさんへ、今、何を考えているかお話しましょう」（横路）

横路　今、日本の政治というのは、非常に大きな曲がり角に来ています。政界再編というのがありますね。大きい流れとしては、この間の参議院選挙の結果、自民党と新進党という2つの大きな政党に収れんされかかっているわけです。それで本当にいいんだろうか。もっと違う政党の選択肢も必要なのではないだろうか。これだけ国民の意見は多様化しているというのに、2つの政党だけで全てを収拾して、本当にうまく政治が行なわれるのだろうか。こういった疑問の答えとして、新しい政党をつくるということが大きな目標としてあります。ただその政党も、今までと同じような組織の在り方でいいのかという問題が一つあるんですね。そこで始めたのが、この「新しい風・北海道会議」です。



いろいろな人が参加してくれていますが、地域の中で町おこし活動をしている人たちが主力メンバーを占めています。それから福祉のいろいろな活動をしている人、小規模授産施設などの運動をしている人、自ら障害を持ちながら運動をしている人たちにもずいぶん参加していただいています。また、都市部で消費者運動をしている人たちや、EM農法などの運動に関わって、農業のサイドから参加してくれている人たちもいます。活動している人たちはそういった意味で、本当に自立した意識を持った一人ひとりなんです。今までの日本の政治というのは、どちらかというと団体主義的な形で動いてきたという面が非常に強くあるんです。そうではなくて、ある意味では欧米社会のように、もっと一人ひとりが自分の責任で判断して行動する。そして一緒にやれる人々がネットワークを結んで、政治を自分たちの方向に向かって変えていく。こういうことでスタートしたのが、「新しい風・北海道会議」です。

今、2つのことをやろうとしています。一つは福祉の問題。福祉に関係する人たちだけではなく、例えば都市政策の専門家や行政の人たち、町おこしをやっている人たちにも入ってもらって、本当にみんなが住みよい地域社会をどうつくるか考える。いろいろな分野の人たちと、協同作業の形で政策化の活動をしていこうというのが一つです。それからもう一つは、農村と都市部とのネットワーク、特に女性を中心としたネットワークを作りたいと思っています。農村の情報をもっと都会に提供する。都会の人たちはもっと農村へ行き、農業などに触れて理解を深める、というような活動もやりたいと考えています。

女・会社員　「新しい風」がつくろうとしている社会は、他人の権利も認める、そして自分の権利も認めてもらうために義務はしっかり果たすという、とても成熟した社会だと思うんです。それをみんなで実現していくのは大変難しいこと。でも私は、それがとても大切なことだと思います。アメリカに〝Down to Earth〟という言葉があります。日本語に訳すと「地に足をつけて」または「実を伴った」という意味になるでしょうか。まわりに流されない、本当に〝Down to Earth〟な「新しい風」をつくっていってほしいなと思います。

男・学生　政治に関しては、若い人は二極分化していると思います。すごくマニアックに知っている人と、全く知らない人と。僕は恥ずかしながら、8月15日が何の日かすぐに答えることができませんでした。このように二極分化している中で、「やっていることは全然マニアックじゃない。だからみなさんついてきなさい」というような高慢な態度に出ていると、今みたいに投票率が下がっていくと思うんです。もう少しわかりやすく説明していかないと、いつまでも政治はよくならないと思います。理念とか理想とかいろいろ言っていても、政治というものには興味が湧かないと思うんですね。僕も実行委員として参加している「よさこいソーランまつり」がすごいのは、速効性のあるネットワークという点だと思っています。形だけではなく、実際にその町へ行って踊りを披露して町を活性化させる。「新しい風」も速効性のあるネットワークになってもらいたいなと思います。

男・福祉作業所職員　政治に関心がある人も無関心な人も確かにいます。でも、すべての人が結局は政治に関わっているんです。ここまでは政治に関係があって、ここからは関係ないということはないと思っています。

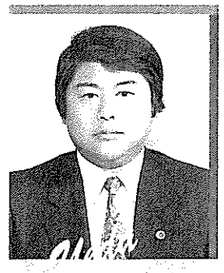
横路　私などがめざしているのは「政治にも選択肢を」ということなんです。やはり反対意見というのは大事なんですよ。だからいろいろな意見が出るというのは実は社会にとって非常に大事なことなんです。これがみんな同じ意見だったら集まって議論する必要もないわけでしょう。いろいろな考え方の人たちが集まって議論をするのが大事なんです。

「新しい風」はスタートしたばかりですので、今は各地域へ出かけて集まりを持つなどの活動をしています。今みんなで会員拡大に努力をしているところです。また、北海道のこの形を全国に紹介していまして、愛知県と新潟県の2カ所ですでに動きが始まっています。新党と「新しい風」との関係ですが、「新しい風」は政党ではありません。しかし、政治に新しい風を巻き起こしていく、というのも活動の一つの目的になっていますから、新しい政党ができた場合にはできるだけ協力関係を持って、いろいろな政策に提言をしていく機会もあるのではないかと思います。

私は「ノーマライゼーション」というのは社会全体の言葉だと思っています。いろいろな人が一緒に生活していこう。みんなで助け合いながら、しかしまたそれぞれに個性や価値観や生き方があるわけですから、いろいろな選択ができる社会、多様な選択が可能な「多元的な社会」をつくっていこうと。日本はあまりにも同質的で集団主義的ですから、いろいろな人がいる社会が大事だと思います。

今日はどうもありがとうございます。

新しい風 北海道会議に寄せて

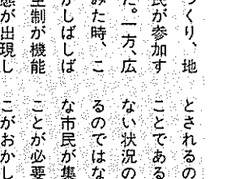


新しい風・北海道会議・事務局長

上田文雄

〔弁護士／NPO推進北海道会議代表委員〕

私たち北海道に住む者は、13年前に「不可能を可能にする闘い」のすえに、横路道政を実現し、地方自治のひとつのあり方を体験した。それまでの官主導型、中央直結・予算引張り型のお任せ政治から、自分たちの地域を自分たちの創意や工夫によって創りあげて行くのだという意識改革は、全道各地において町づくり村づくり、地域起しの実践に市民住民が参加する気風を作り上げてきた。一方、広く国政レベルの政治をみた時、ここ数年の間に政権交代がしばしば起こり、形の上では民主制が機能しているかに見える状態が出現している。しかし私たちの日常の感覚として本当に政治は変わったか、私たちの国政への参加意識が以前と異なるようなエネルギーを持ち得ているかといえば、必ずしもそのようにはなっていない。政党の組み合わせによって政権は交代するものの、私たちが政治に参加していないという実感は相変わらず変化がないように思われる。特に小選挙区制が導入され、何か絶望感や無力感の方が先行してはいないだろうか。そんな時にこそ必要とされるのが、市民が声を上げることである。何となく展望が見えない状況の中でただじっとしているのではなく、旗を揚げこのような市民が集い政治を語る場を作ることが必要である。今の政治のここがおかしい、ここが嫌いだということを真正面から語り合い、語り合えるもの同士がその存在を確認しあえることがまず求められていると思う。新しい風・北海道会議はそのような場として、多くの市民の方々の参加を得て、自分達の生活を踏まえた具体的提案を政治過程に反映させる集団となることを目指している。このような私たちの活動が、全国の心ある人々と新しい極を作る大きな流れになるよう、多くの方々の参加をここに呼びかけたい。



新しい風・北海道会議・代表委員

辻井達一

〔北星学園大学教授〕

風にも、つまり空気にも香りというものがあるものだ。それはもちろんその場所に発生源がある何物かが運ばれてくるもので、それには花や果物あるいは樹々といったものからいろいろな種類の工場からの金属性あるいは鉱物性のものまで多種多様だ。

東南アジアでは私たちはしばしば椰子油やコプラの香りに敏感になる。それはきっと嗅ぎ慣れないところから余計、そう感じるのではないか。明治初期に日本にやってきた外国人の多くが日本の町は魚の臭いがする、と言ったのもその一つであろう。

逆に慣れてしまうと何かの臭い・匂いに麻痺してしまうということかもしれない。

同じことなら清々しい香りの風が有るといい。気持ちのいい空気の中で生きたい。北海道はまだまだいい香りのする空気に恵まれているほうだろうが、それを失わずにさらにもっと良い風を。

新しい風・北海道会議・代表委員

横路孝弘

〔前北海道知事〕

多くの若者に出会った。新しい風・北海道会議の地域集会で元気に質問する若者に、厳しい就職状況の底にあるものを見据えようとする鋭い目に、そして、町づくり、町おこしに取り組もうとする勢いを秘めた若者に出会った。そうした人々をつなぎ、政治を取り戻して行くことが必要であろう。

新しい風・北海道会議は、ネットワーク政策集団として活動することを提唱している。一人一人が、自立した個人・市民として参加する新しい政治組織である。これは「成熟した市民社会」をも生みだしてゆくことにもつながるであろう。全国各地に「新しい風」方式が拡大してゆこうとしている。

つくり出されるナショナルパーティが、大きなネットワーク政策集団を持つこと、大きな市民のネットワークに支えられることが日本の政治の再生にもつながるであろう。

新しい風・北海道会議・代表委員

小林勝彦

〔前厚沢部町長〕

地方自治体と国が対等の関係になる。市民権が平等であるように、自治体相互の関係が対等の関係になってゆくことが必要でしょう。地方分権をめぐる今日の議論に注目しているし、また、ラストチャンスでもあろうと思っています。

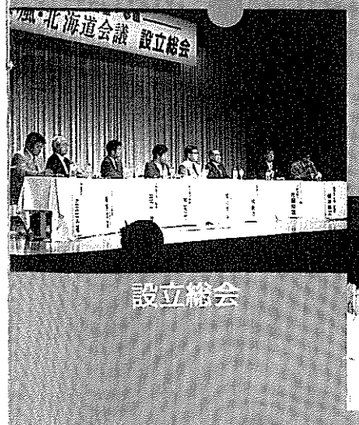
町づくりに最も大切なものは、人のつながりです。ネットワークです。

政治に大切なものもネットワークです。新しい風・北海道会議が、ネットワーク政策集団として人々をつなぎ、町をつなぎ、政治をつないでゆくものと確信します。

新しい風 北海道会議活動報告

（1995年10月28日現在）

7.29	新しい風・北海道会議設立総会
8.12	新しい風・北海道会議運営委員会
8.17	帯広集会「帯広交流会・福祉交流会・議員団交流会」
8.28	中標津集会「横路孝弘と語る夕べ」
9.5	岩見沢集会「横路孝弘と語る夕べ」
9.6	ヤング・ミニ・フォーラム
9.16	リベラルフォーラム香川（高松）
9.22	リベラルフォーラム静岡
9.30	対談＊日本政治の行方 ー市民参加の政治をめざしてー黒田清VS横路孝弘
10.4	旭川集会「横路孝弘と語る夕べ」 ーいま何故「新しい極」の構築をめざすのかー
10.5	網走集会「横路孝弘と語る夕べ」
10.6	釧路集会「横路孝弘と語る夕べ」
10.9	リベラルフォーラム神戸（兵庫）
10.11	稚内集会「てっぺんフォーラム」
10.13	江別集会 〜新しい風・北海道会議の運動ともう一つの政治勢力のめざすもの〜
10.19	リベラルフォーラム新潟
10.28	近畿リベラルフォーラム（大阪）



設立総会

岩見沢集会

釧路集会

中標津集会

旭川集会